

動きを通して学ぶ音楽の指導手法に関する一考察

—2012 DSA NATIONAL CONFERENCE における
ワークショップ「Eurhythmics」の学びを通して—

秋元 文緒¹⁾ 仲嶺 まり子²⁾ 善本 桂子³⁾

Consideration for Motion-Driven Instruction Method to Learn Music:
Learnings from Workshop “Eurhythmics” at 2012 DSA NATIONAL CONFERENCE

Fumio AKIMOTO Mariko NAKAMINE Keiko YOSHIMOTO

【要 旨】

本稿は、SEATTLE PACIFIC UNIVERSITY (SEATTLE,WA) で開催された2012 DSA¹⁾ NATIONAL CONFERENCE における Lisa Parker, Annabelle Joseph 両氏の「Eurhythmics」(Beginning, Intermediate) の授業概要およびそれについての考察である。研究目的は、両氏の授業手法を考察することで、動くという活動を通して学ぶことのできる音楽経験とはどのようなものかについて学び、保育者および教員養成における「音楽」や「音楽表現」、「表現」の授業活性化に役立てていくことである。

結論を先に示すと、効果的な動きを伴う音楽の経験が、音楽概念の理解や感性の覚醒、表現やコミュニケーション力向上へつながる体験であり、その有用性と可能性について明らかにすることができた。すなわち、指導の特徴的手法としては、自己と向き合う十分な時間の確保、身体感覚を想起させる言葉、隊形変化による活動の視覚的提示などによって、指導者の意図を理解しながら動きが導き出されることが認められた。また、考察を通して、導入と主活動との具体的なつながりやゲーム的要素を含んだ教材の導入、独自性を持った言葉の選び方など、今後の課題が明らかになった。

【キーワード】

保育者養成 表現 音楽と動き 保育者の感性

¹⁾ 埼玉大学・昭和女子大学 ²⁾ 別府大学短期大学部 ³⁾ 広島文教女子大学

1. 研究の背景と目的

(1) 背景

幼稚園教育要領及び保育所保育指針における領域「表現」では、「感じたことや考えたことなどを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と定められている。保育者養成に携わる筆者等は、このような保育を実践するために必要な豊かな感性を育てることを目的に「音楽」や「音楽表現」、「表現」の授業を展開している。領域「表現」における音楽に関する記述は、幼稚園教育要領では、2内容(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。また、保育所保育指針では、(イ)内容②保育士と一緒に歌ったり、手遊びしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。⑥は前述の(4)、⑧は前述の(6)と同様の内容である。

これらの文章から読み取れるように、音楽に親しむこと・楽しさを味わうこと・身体を動かしたりして遊ぶということが、子どもとの関わりの中で音楽がどのように活かされることが望ましいのか、という点について考える上で重要であるということを示唆している。このような子どもと音楽との関わりについて、今川氏は『保育内容 音楽表現の探求』において、「音楽は、子どもの育ちの中でどのような意味を持つのでしょうか。」¹⁾と問い、無藤氏は、『領域表現』において「子どもたちは音楽を聞いているとじっとしてられない、思わずからだが動いてしまう。」²⁾と述べている。

そのようなことをふまえ筆者等は、保育者を目指す学生には、まずは音楽を楽しむ経験が必要であると考え、特に動きを伴う活動では、「音楽遊び」や「音楽ゲーム」を取り入れながら授業を行ってきた。しかし、多くの場合、ゲームや遊びに夢中になってしまい「音楽を聴いたり感じたりする」という本来の目的を達成

することができずにいた。そのような状況下、音や音楽への気づきをどのように導き出したらよいのかという一つの方法として、2012 DSA NATIONAL CONFERENCEにおけるワークショップ受講を通して、音楽表現の指導手法を学ぶことにした。

(2) 目的

本研究では、平成24年6月20日(水)～22日(金)にかけて、SEATTLE PACIFIC UNIVERSITY (SEATTLE, WA)において開催された2012 DSA NATIONAL CONFERENCEにおける「Eurhythmics」(Beginning, Intermediate)の授業の中から、Lisa Parker, Annabelle Joseph 両氏が行った授業概要をまとめ、省察することによって、動くという活動を通して学ぶことのできる音楽経験とはどのようなものであるのか。また、その活動を引き出し導いていくために、指導者が行うべき単元へのアプローチや授業の構成手法はどうあるべきなのかについて学び、保育者および教員養成における「音楽」や「音楽表現」「表現」の授業の活性化に役立てていくことを目的とした。

2. 方法

(1) 講師および受講者

講師は、Lisa Parker²⁾、Annabelle Joseph³⁾の2氏で、それぞれ60分間の授業がなされた。受講者は、音楽教育に関わる成人約30名であった。

(2) 手続きおよび研究方法

当該研究者3名(秋元・仲嶺・善本)が、Lisa Parker, Annabelle Josephの両氏が行った「Eurhythmics」(Beginning, Intermediate)の授業2講座に受講者として参加し、受講時の記録を元に授業内容をまとめ、それらの内容を、動きによる学び、指導者の言葉がけ(指示)、フロアー(受講者)の様子、活動時の隊形、時間配分、楽曲の視点より考察を行った。さらに、内容の客観性を高めるために、DSA

のHP上で会員対象に公開されているこの2講座についてのVTRを参照した。

3. 結果と考察

(1) 2講座の概要

Lisa Parker氏の授業では「歩く」ことによる「ウォーミングアップ」から簡単な「基礎リズムのステップや手拍子」、次に「リズムパターンのステップや手拍子」、「グループ2・グループ3のステップや手拍子」の活動の後、「7拍子」の曲の創作表現を行うという流れであった。

Annabelle Joseph氏の授業では、自分の名前や隣人の名前を唱えていく「ウォーミングアップ」から動きによる「拍子感」の体験、次に「メロディーの内的聴取」によるテンポの再現の活動を行った後、軽快な曲による「フレーズ表現」の指導が行われた。

(2) Lisa Parker氏の授業概要

1) 「ウォーミングアップ」(約12分間)

① 音のない状態

・手を高く大きく広げ、タッチ手拍子⁴⁾などで教室の空間を感じ取りながら各自自分の速さで歩く。他の人と笑顔を交わす。自身の感性や身体を感じながら歩く。

・2人で手を取り合い、アイコンタクトを取りながら自由に身体を動かして歩く。言葉を使わず、自分とは違う相手のテンポを感じ取り、徐々に2人のテンポを合わせていく。

② 音のない状態から音のある状態へ

・再び1人に戻り歩く。受講者の動きが揃ってきたところで、その動きに添うように指導者の奏でるピアノの音色が流れ、よりのびやかな動きが引き出される。

③ 音楽(ピアノ)を聴きながら

・音楽を聴きながらそのニュアンスを感じ、腕や体を大きく動かして歩く。

・音楽が停止したタイミングで、両手をさまざまな方向に向けて静止し、ちょうど向き合った人と笑顔を交わし、アイコンタクトでコミュニケーションを取り合う。

2) 「基礎リズムのステップ」(約7分間)

・音楽を聴きながらステップ(4分音符)と手拍子(8分音符)を行う。

・ステップ(8分音符)と手拍子(4分音符)を“スイッチ”の合図で交換して行う。

・前項を提示された音楽のテンポとニュアンスの変化を感じつつ腕を大きく動かす等、より躍動的な動きをつけて行う。“チェンジ”の合図で交換

3) 「リズムパターンのステップ」(約13分間)

・ピアノで提示された「メロディー」(譜例1)をステップし、8小節毎に方向転換する。

・譜例1の「メロディー」をリズム打ちし、フレーズの切れ目で方向を変える。

・ビートをステップしながら、譜例1のメロディーを終わりからリズム打ちする。

・ビートを手拍子しながら、譜例1のメロディーを終わりからステップする。

・2人で、譜例1のリズムパターンを始めからと終わりからと(譜例2-1・2-2)行う担当者を決め、ステップで表現する。

・前項のリズムパターンを身体全体を使って表現⁵⁾しながらステップする。

・2グループに分かれて、この活動を発表する。互いのリズムを関係させながら、補足的に呼応表現をする。

4) 「グループ2・グループ3」(約14分間)

・音楽を聴きながら、4分音符のビートと付点4分音符のビートのステップに合わせて、グループ2とグループ3の手首のタッピングを行う。

・音楽を聴きながら、グループ2とグループ3の様々な組み合わせ(譜例3)をビートに合わせて身体全体で表現する。

・8人グループで音楽を聴きながら、手拍子回し⁶⁾を行う。次にグループ2とグループ3の4分音符と付点4分音符のビートの手拍子回しを行う。

5) 「7拍子」(約7分間)

・初めにLisa Parker氏の「Two(♪♪) - Two(♪♪) - Three(♪♪♪)」の言葉に合わせてビートを手拍子する。次にLisa

Parker氏は「ショート(♪)ーショート(♪)ーロング(♪.)」の言葉を提示し、その言葉ごとに3人で手拍子のリレーを行う。

- ・さらに音楽(譜例4)を聴きながら3人で、同様のリズムリレーを行う。
- ・手拍子で表現したことを、いろいろなポーズをとることで表現する。さらに、よりクリエイティブな動きで行う。
- ・2グループに分かれて、前項の活動を発表する。

譜例1.



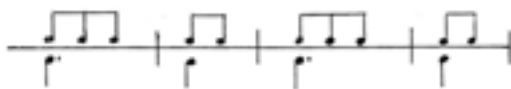
譜例2-1



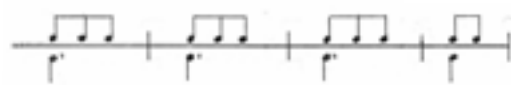
譜例2-2



譜例3-1



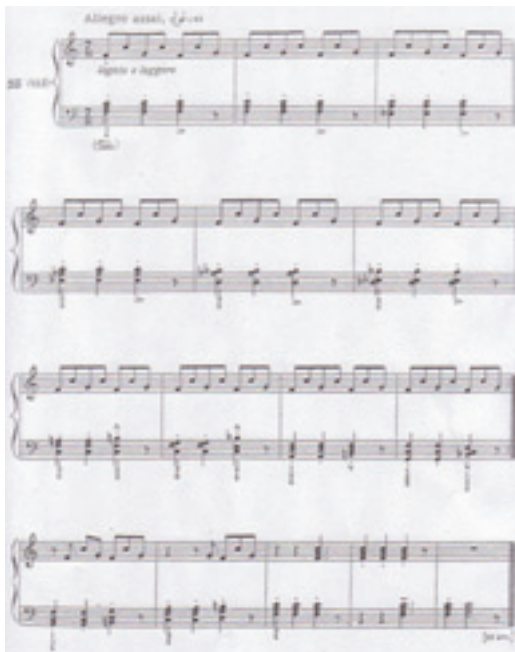
譜例3-2



譜例3-3



譜例4.



(3) Annabelle Joseph氏の授業概要

1) 「ウォーミングアップ」(約10分間)

・全員で大きなサークルを作り、隣り合った自分を含めた3人の名前を自分→右→左の順にジェスチャーを交えて4分音符のビートにのせて紹介していく。

・位置移動の後、提示されたテンポをキープして前項の名前紹介を行う。

2) 「拍子感」(約10分間)

・サークルで二人ずつ向き合い右手で握手しながら挨拶する。次に前方の相手と左手で握手をして相手を変えて行く。これら一連の動きを「1, 2, 3」と言いながら3拍子を感じて行う。

・前項の一連の動作を音楽に合わせて行う。

・ピアノの音の合図で、サークル内で位置を移動し、再び相手交替の活動に戻る。

つながっており、「Eurhythmics」における緊張と弛緩の動きを学んでいると考えられた。

また、授業の構築方法や効果的な指導についても多くの示唆を得ることができた。Lisa Parker氏は、リズムパターンの指導に向けて、そのリズムパターンに出てくる基礎リズムのステップおよび手拍子を十分に行った後、課題を提示していた。また、7拍子の指導においても4分音符と付点4分音符のビートのステップしながらグループ2・グループ3をさまざまに組み合わせたりリズムパターンを提示し、それらを十分に経験した後に7拍子表現の指導を行っていた。

同様に、Annabelle Joseph氏の授業においても、拍子感の指導に向けて、3人の名前を紹介する活動から自然に3拍子を感じることで、3というキーワードをヒントに指導者の意図を理解しながら動くことができた。このことから、Annabelle Joseph氏がはじめから拍子そのものを指導するのではなく、拍子につながる数種類の活動を提示した後に指導を行ったように、指導目的に対してダイレクトに取り組むのではなく、その目的につながっていく予備活動を提示し、十分に行うことが、より内容の理解度を深める結果を生むということが示され、同時にその重要性が明らかになった。

(5) 言葉とイメージの結びつき

Lisa Parker氏の7拍子の指導では、ビートを「Two (♪♪) - Two (♪♪) - Three (♪♪♪)」「ショート(♪) - ショート(♪) - ロング(♪♪)」という言葉で表現して活動したことで、動きをイメージ化し易くなったことと、終了時に楽譜(譜例4)が渡され、記号化された7拍子と自分の行った表現との関連性を瞬時に理解することができた。このことにより、動きのイメージ化に結びつく言葉の選び方が重要であることが示された。

(6) 受講者間の学び

Lisa Parker氏の「ウォーミングアップ」

において、音のない状態からピアノの音色が変わったことによって、よりのびやかな動きが引き出された。また、一人で歩く活動だけでなく、2人で歩くことを経験した後では、空間やテンポの共有を感じながら歩くことができていた。このことにより、それぞれの感性を引き出すために他からの刺激を挿入するという方法が効果的であると考えられた。

また、Lisa Parker氏の授業の受講後に受講者の中で交わされたディスカッションの中で、この「ウォーミングアップ」における「ウォーキング」は、経験の違いによって時間への感覚が異なって受け止められているのではないかという意見が出された。例えば、初心者にとっては初めて道を歩く時のように、探り探り表現するため、時間が長く感じられる。しかし、経験者はどのような感情移入をすればよいのか、どのように身体を使ったらよいのかを理解しているため、自身で時間を組み立てながら見通しを持って活動できているため、それほど長く感じられないのではないか、というものであった。

この点については、初心者には初心者の気付き、経験者には経験者の気付きが可能な活動が展開されているとともに、互いに刺激し合うことでさらに感性が磨かれ、授業への道筋が開かれていくという、まるで絡まっている糸が一本一本ゆっくりと解かれていくような感覚を味わい、受講者は指導者自身の感性を感じ取ることができた。

Annabelle Joseph氏では、「ウォーミングアップ」の活動をすることによって、3つの拍がはっきりと示されるようになり、3拍子が目に見える形となったことで、指導者の意図と共に活動の目的が明確にされた。そのことにより受講者の理解が深まり、一人一人の活動への意識が活性化し、コミュニケーションの楽しみにつながったと考えられた。

このように両氏の授業は、ウォーミングアップの時間を十分とって、丁寧に活動の展開や目的に合わせた活動を積み上げていく過程を大切にしていた。このことにより自己と向き合う時間を十分に確保することが活動をより充実させ

ることにつながると考えられるのである。

(7) 楽曲と活動隊形について

授業の中で取り扱った楽曲について、Lisa Parker氏は、オリジナルの8小節のメロディーとそのリズムパターン、8分の7拍子の既成曲とその予備活動となる最小単位の「グループ2.グループ3」のリズムパターンを使用し、受講者にそれらの組み合わせによる楽曲への移行過程を明示していた。

Annabelle Joseph氏は、全活動を通して、3拍子の既成曲並びに3拍子のオリジナル曲が使用されていた。このことは、拍子理解はもちろんのこと、指導者の意図が最も伝わると思われる曲の選曲および、初めて耳にする曲への新鮮な緊張感と広く知られている曲による安堵感との交互提供という点において、受講者の意識の集中を図ることに効果的であった。

また、活動に応じて、Lisa Parker氏は1人→2人→8人→3人、Annabelle Joseph氏は、サークル→1人→2人とグループの人数や隊形を変えながら効果的に指導を行っていた。特に、サークルでの位置移動・相手交替の方法は大変参考になった。このことにより、隊形が変化することで活動の変化を視覚的に捉えることができ、単元への理解がより深まると考えられた。

4. まとめと展望

今回のワークショップ受講により、効果的な動きを伴う音楽の経験が、音楽概念の理解や感性の覚醒、表現やコミュニケーション力の向上につながることを体験し、「動きを通して学ぶ音楽」の有用性を明らかにすることができた。また、保育者養成や教員養成における「音楽」や「音楽表現」、「表現」科目では、指導者自身がより高い感性と表現技法を求め続けることがそれらを伝える重要な要素であることを再認識し、一層の研鑽の必要性を痛感した。今後は、今回体験した「動きを通して学ぶ」というこれらの手法を参考にしながら、豊かな感性を育む

ための授業内容の充実を図りたいと考えている。

加えて、今回のワークショップ受講とその活動内容の考察を通して、導入と主活動との具体的なつながりや指導内容に応じた効果的なゲーム的要素⁸⁾を含んだ教材の導入、独自性を持った言葉の選び方などの課題が明らかになった。今後は、本研究で得た知見を活かし、自らの授業への反映と、その内容について授業実践を振り返りながら研究を進めていく考えである。

付記

本研究は、平成24年度日本音楽教育学会九州地区例会における口頭発表「動きを通して学ぶ音楽 (1) - 2012 DSA NATIONAL CONFERENCEにおけるワークショップ「Eurhythmics」を通して-」を加筆修正したものである。

また、本研究において仲嶺は、別府大学特別強化助成金(研究支援短RS1)の助成を受けている。

註

- 1) DSA : Dalcroze Society of America (アメリカダルクローズ協会)
- 2) Lisa Parker : ロンジー音楽学校主任教授 同校のダルクローズ夏期講習のディレクター。
- 3) Annabelle Joseph : カーネギーメロン大学教授 同ダルクローズ・トレーニングセンターのディレクター
- 4) タッチ手拍子 : 音のない手拍子、空間を感じることができる。
- 5) 身体全体を使って表現 : 音符の長さを表現するだけでなく、スタッカートなどを感じながら、腕の動きやステップの動きを自由に表現する。
- 6) 音楽を聴きながら、手拍子回し : ビートに合わせて、1拍ずつ隣の人に手拍子を伝言ゲームのように回していく。
- 7) 内的聴取 : 伊藤(2012)は、「リトミックの教育目的の根幹は、内的聴取(inner ear)の獲得である。「聞いた音符の名前や関係を区別できる聴覚」はいわゆる外的聴取といえるが、これだけでは音楽的に優れた良い聴覚、というには不十分なのである。外的聴取を備えた上でさらに音楽の持つ情動や、音楽が表現しようとしている事柄を感受し共感することのできる内的聴取を習得することで、

真の音楽的に優れた聴覚の獲得に繋がるのである」³⁾と述べている。このことから、音楽を聴くときに、その音楽だけを聴き取るのではなく、その音楽の中に含まれる様々な音楽的な要素を感じ取ったり、直感的にイメージを膨らましたり、感情移入をしたりして聴き取ること。と考えられる。

- 8) 効果的なゲーム的要素：音楽との積極的な関わりや音楽的要素への意識を高めるために効果的と思われるゲーム性。

引用文献

- 1) 大畑祥子編、『保育内容 音楽表現の探究』, 相川書房, 1998, p. 1
- 2) 無藤隆監修, 浜口順子編, 『事例で学ぶ保育内容領域 表現』, 萌文書林, 2007, p. 155
- 3) 伊藤仁美, 「保育者に必要とされる音楽表現力の育成に関する一考察 (3)」, 『こども教育宝仙大学紀要』第3号, 2012, p. 22

参考文献

- 1) エリザベス・バンドウレスパー著, 石丸由理訳, 『ダルクローズのリトミック』, ドレミ楽譜出版社, 1996
- 2) 小林美実監修, 高野雅子編, 『表現 幼児音楽②』, 保育出版社, 1994